宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

初修外国語における学習意欲向上の試み：中国語・韓国語語学コーナー開設をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2011-10-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上原, 徳子, 藤井, 久美子, 金, 善美, Uehara, Noriko, Kim, Sunmi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/3501

宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学　第25号（2011）1－16頁

初修外国語における学習意欲向上の試み
―中国語・韓国語語学コーナー開設をめぐって―

上原徳子[i]　藤井久美子[ii]　金善美[iii]

An Attempt to Enhance Students' Motivation in Beginners' Foreign Language Class
―Creating a Chinese and Korean Language Study Lounge―

Noriko UEHARA　Kumiko FUJII　Sunmi KIM

はじめに

宮崎大学（旧宮崎大学と宮崎医科大学合併後の宮崎大学を指す）では、初修外国語に平成14年度から中国語が、平成21年度から韓国語が加わった。授業の形態としては、平成22年度からは農学部と医学部の学生のみ週１回の授業を１年間受けるかたちに変更があったものの、それまで医学部の一部を除き週２回の授業が１年間受講されており（ただし、単位はそれぞれの授業で認定される）、現在も初修外国語が必修の通年単位であることは変更されていない。

中国語及び韓国語は、前者は近年の中国の経済的な発展・国際的競争力の増大により主に実用的な面からの関心、後者は韓流ブームといわれる文化的関心から、本学での履修希望者が増加している。特に韓国語の履修希望者は、年々増加傾向にある。両言語とも、学生からの需要の高まりがあることは事実だが、それが学生の求める、あるいは大学の求める語学力の獲得と繋がっているかは、明らかではない。すくなくとも、中国語はここ数年の検証において、学生、教員ともに理想と現実の乖離に気づきながらもそれに効果的な方法をとることができていないことが明らかになっている。

本稿は、平成22年度後期に行った中韓両言語の教員の試み「語学コーナー」について、まずその開設の経緯を述べ、さらに各言語ごとに学生に行ったアンケートに基づいて分析、検証し、さらには今後の展望について考察したものである。

なお、「はじめに」「１章」「４章」「おわりに」の執筆及びアンケートの作成、集計を上原が、「２章」の中国語に関する分析を藤井が、「３章」の韓国語に関する分析を金が担当した。

また、今回検証・分析のために集計されたアンケートについて述べておきたい。アンケートは、講師役の留学生、管理役の日本人学生、及び中国語・韓国語を履修した全ての学生[iv]に対してそれぞれ３種類用意された。それらのアンケート調査は、留学生・管理役学生には全日程終了後に、履修学生に対しては、最終の講義の際に行われた。

１．語学コーナー開設の経緯とその運営について

「語学コーナー」は、そもそも中国語の「日文角（日本語コーナー）」を由来として命名された。中国では、いろいろな言語の「〜〜角」が設けられている。大学内で定期的に開かれる場合もあれば、街中で有志が定期的に開催することもある。英語や日本語など外国語を学ぶ人々が、その場所を訪れ、ネイティブスピーカーと話をし、自分の言語能力を高めることを目的としている。この場を宮崎大学で通常の授業の他に設け、教室で外国語を学んだことを実際に留学生相手に運用してみることで、履修中の学生の語学力・学習意欲ともに高められると考えた。

宮崎大学中国語講座では、平成20年度後期に、月曜日・火曜日・木曜日の昼休みに、中国人留学生との会話練習の時間を設定し、学生がその会話練習に参加した場合は、１回の参加につき成績に１点を加点するという試みを行ったことがある。これは、授業時間内になかなか設けられない同年代の中国人学生とふれあう機会を提供し、学生の学習意欲及び会話力の向上に役立てようというものであった。しかし、講師を担当した留学生への事前指導不足もあり、留学生が一方的に教科書内容を「教える」形式になってしまい、会話能力の向上に直接結びつけられなかった。また、参加者は、加点を目的にした者がほとんどであり、そのインセンティブがなければ、自ら時間を作って参加しようとする者は少なかった。

この試みは、成果を上げることなく終わったが、その後の調査と分析によると[v]、中国語を履修する多くの学生が中国人学生との交流を望んでおり、またそれが学習意欲向上の動機となり得ることがわかった。そこで、平成22年度後期に、韓国語担当教員の協力を得て、本格的に「語学コーナー」を設け、学生の意欲向上を促し、かつ教育的効果をあげる試みを行うこととなったのである。

１．１　語学コーナー運営方法について

「語学コーナー」は、平成22年度後期から宮崎大学に派遣された交換留学生に講師を依頼することとした。韓国からの留学生３大学７人、中国からの留学生１大学４人が参加した。また、講師となる留学生には各言語の担当教員により事前の講習が行われた。

参加者となる中国語及び韓国語を履修している日本人学生には、希望者に「会話練習ポイントカード」が配布された。１回参加すると５ポイント、さらに時間外であっても留学生に中国語や韓国語で話しかけると１ポイント獲得できる。最終的なポイントの合計20ポイントごとに平常点１点が加点される。

「語学コーナー」は平成22年11月から翌年１月にかけ、休日や冬期休暇以外の毎週月曜日・木曜日の16時30分から18時30分の全19回、教育文化学部講義棟L414で行われた。曜日は初修外国語の授業がある月曜日と木曜日を選び、時間帯は以前中国語講座で会話練習や検定対策の補習を昼休みに行った際、昼休みは忙しいので参加が難しいという意見が多かったことを考慮して７−８限終了後に設定した。毎回、講師役の韓国人学生及び中国人学生各２名と管理役の日本人学生が１名配置された。日本人学生は、会場と会話練習に参加する学生のポイントカードと講師の留学生が休むことがないかどうかを管理する。この役割を担った学生は７名であった。教員が管理運営を担当すると、常に教室に教師がいることになり学生達の自然な会話の場を阻害してしまう。また実際は、会議などの校務があるため教員が時間の間ずっと同じ教室にはいられない。従って、管理役の学生が必要であった。

「語学コーナー」に参加する中国語・韓国語を履修中の日本人学生は、まず、会場である教室の入り口にいる管理役日本人学生にポイントカードを渡し受付を済ませる。次に、韓国語か中国語を選んで該当の留学生の前に座る。そこで、用意された会話教材に基づいて自己紹介など簡単な会話練習をする。時間は、混雑していなければ無制限だが、15分で帰ってもよい（それより短い滞在は認められない）。学生が帰る際には、管理役の学生からポイントを記載されたポイントカードを返却してもらう。各学生の参加状況は毎回管理人役学生により記録され、さらに教員が集計を行った。また、最終の授業時に各自のポイントカードが教員に提出された。

１．２　参加学生について

全期間を通しての参加者は28名であった。この中には、交換留学生自らが他の言語を学ぶために参加した場合も含まれるため、それらの留学生を除くと、韓国語と中国語の履修者からの参加者は、23名であった。うち、韓国語を練習しに来た者15名、中国語が８名、最も多く参加した学生は中国語で12回、韓国語で10回であった。

また、23名の平均参加回数は４回、平均の獲得ポイントは約20点であったが、１回のみの参加者が９名おり、何度も参加する学生とそうでない学生の差が大きいといえる。これに加えて通常授業における平常点の加点という学生にかなり有利な条件を示したにもかかわらず、参加者が思うように伸びなかった理由等は、この後のそれぞれの言語ごとの分析にゆずりたい。

２．中国語のアンケート結果の分析とその考察

以下では、語学コーナーについて中国語クラスで行ったアンケート結果を分析したい。

宮崎大学には農学部、教育文化学部、工学部、医学部の４学部があるが、初修外国語においては、医学部生は農学部生と同じクラスで受講する。これは、医学部ではドイツ語の履修を希望する学生が圧倒的に多く、医学部単独でクラスを構成することが難しいからである。医学科・看護学科の学生を合わせても希望者は10名に満たないことがほとんどである。

２．１　アンケート結果分析

２．１．１　コーナー設置に対しての参加実態とその背景

今回のアンケートは各学部（医学部は農学部に含む）に２クラスずつある中国語クラス全てで実施した。加えて、２年次以降にも継続的に中国語の履修を希望する学生向けに開講される「選択中国語」クラスのⅡ（Ⅰは前期開講。Ⅱが後期に開講。）においてもアンケートを行った。２年次後期の中級クラスということもあり、「選択中国語Ⅱ」の履修者は例年10名ほどである。１年次生向けのクラス規模は、１クラスあたり、教育文化学部が約40名、農学部（医学部を含む）と工学部が約50名である。アンケート実施日に欠席の学生もいたことから、各学部、クラスで回収したアンケートは、教育文化学部が74名、農学部が100名、工学部が95名、そして、選択中国語Ⅱクラスが11名で合計280名分であった。

まず、アンケートの１問目では「語学コーナーに行きましたか？」と尋ねた。その結果は、「はい」と答えた者が全体で８名という散散な数字に表れた。回答者全体の３％[vi]である。３ヶ月間で全19回あったにもかかわらず、272名は一度も利用しなかったというのである。では、なぜ参加しなかったのか、その理由について尋ねてみたところ[vii]、58名（約21％）は語学コー

ナーの時間に他の授業があったから、ということであった。これはやむをえないと考えられる。では、残る学生はどのような理由を答えたかというと、「参加する必要が感じられなかったから」が24名（約９％）、「興味がなかったから」が97名（約35％）で、消極的態度ともいえる回答が全体の43％を占めた。残る学生は「その他」の理由を選んだ。その他の理由としては、アルバイトやクラブ・サークル活動があったから、という回答が多くみられた。他に自由回答で目についた理由としては、「勇気がなかった」や「一人では行きづらかった」というものがある。近年、大学生の内向き姿勢（海外に対する関心の低さ）やコミュニケーション能力の不足は社会でも問題視されているが、これらに通じるものがあると言わざるを得ない。他に、平常点への反映度への低さを唱える者が数名いたが、本来、大学の単位というものが授業とその授業と連動した予習・復習に対して与えられるものであることを考えると、全員参加が条件的に不可能な催しに高い点数を与えることは不可能である。そもそも、教員側は、留学生とのコミュニケーションという慣れない活動に取り組む際の心理的なハードルを越えるのにモティベーションとなるよう、平常点への加点ということを考えただけで、点数を与えることが目的ではない。理想を言えば、成績への加点や教師による場のセッティングなどなくても、留学生と言語交換をしながら交流が深まればよいのである。

では、参加した８名の学生の反応はどうであろうか。語学コーナーに行った理由として挙がったのは、「知り合いになりたかった」５名、「留学生と中国語を使って話してみたかった」６名、「自分の語学力を向上させたかった」３名、「成績に加点したかった」５名、その他（「授業で理解不足の部分を教えてほしかった」）１名であった。（複数回答可であるので、回答を合計した数は「８」よりも大きくなっている。）行かなかった学生の中に、「１回や２回行っただけで、役に立つわけがない」と回答した者がいたが、「知り合いになる」「話してみる」といったことならば、１、２回でも十分可能である。実際に、参加した学生達からは、語学力がすぐに向上すると考えたというよりは、友達になってコミュニケーションをとってみたかった、という声が挙がっている。参加した感想としては、「（テキストの他に）一般的に使う応用文も教えてくれたのでよかった」という回答以外にも、「留学生と友達になれてよかった」「中国について様々なことを教えてもらえてよかった」「中国語や中国に興味を持てた」など、語学力そのものの向上よりも交流から生まれる理解、ということに価値を見出している学生がいて、言語習得のあるべき目標に近づいている点で収穫であるといえる。

ここまではコーナー設置に対しての参加実態とその背景を分析した。次には、語学コーナーそのものに対する意見を見てみたい。

２．１．２　語学コーナーそのものに対する意見

「語学コーナーは中国語の習得に役に立つと思いますか？」という質問には回答者276名中[viii]、教育文化学部で59名、農学部で76名、工学部で69名、選択中国語Ⅱで９名、合計213名（77％）、つまり、８割近くの学生が「はい（役に立つ）」と答えた。ちなみに、「（役に立つと）思わない」は工学部で１名、農学部で２名の計３名のみであった。残りの60名（22％）は「わからない」と回答している。「（役に立つか）わからない」の理由として最も多かったのは「行ったことがないので」であった。他には、文法や単語など、わからないことがまだ多いので会話できない、という意見もあった。教員は授業の中などで、とにかく一回行ってみて留学生と友達になってみよう、とか、留学生は日本語もできるから日本語と中国語を教えあえばいいよ、

というようなことも伝えていたのだが、学生にとってはぺらぺらと話すことが会話だと考えているようである。これと関連して、「語学コーナーを新学期入学してくる１年生に勧めたいと思いますか？」という質問への回答としては、「思う」が83名（33%）、「思わない」が21名（８%）、「わからない」が150名（59%）という結果であった[ix]。これら２つの設問から明らかになることは、語学コーナーは役に立つものとして学生も関心・興味をもち、また、評価もしているのだが、結果としては参加者が限定的であったため、次年度入学の後輩たちに勧めるという段階にまでは至らなかったと考えられる。

では、どうすれば参加者が増えると思うか、これについても学生達に意見を聞いてみた。選択肢としては、「平常点にもっと反映する」「時間帯を変える」「場所を変える」「もっと宣伝をする」「先生役を留学生ではなくて教員がする」「その他（自由記述）」を設け、複数回答可能とした。得られた回答は総数249であった。このうち、最も多かった回答は「平常点にもっと反映する」で90名である。先にも述べたように、モティベーションを高める方法として成績への加点を行ったが、これに対する効果や評価の判断は難しい。参加した学生には動機づけとして存在し、また、参加しなかった学生にとってもより一層の参加を促す方法としてとらえられてはいるが、では、どの程度の加点が望ましいのであろうか。加点の幅が大きくなると授業本来の機能を失うし、かといって、少なすぎると動機づけにならないというジレンマに陥る。今回も、スタート当初は20ポイントで１点だったものを後半には５ポイントで１点に引き上げたが、それでも参加者は増えなかった。ポイント交換率アップを発表した時の学生の冷めた反応（無関心）を考えると、彼らはかなりの反映を望んでいるとも考えられるが、それは実現不可能と言わざるを得ない。

次に多かった回答は「時間帯を変える」（61名）と「もっと宣伝をする」（62名）である。学生には授業中にプリントを配布して説明したり、その後も何度も口頭で紹介したりしたが、それでも宣伝が足りないと感じたようだ。学生の中には授業時に指示した試験やレポートなども、時に「知らなかった」という者がいるので、それと通じるところがあるのかも知れない。言いすぎると、真面目な学生からは「しつこい」といわれることもあるので本当に難しい。もう一つの選択肢である「時間帯を変える」については、自由記述欄に「昼休みにする」などの提案が書かれていた。昼休みという時間帯については教員側も当然検討した。しかし、これについては、以前、中国語検定試験の対策講座を昼休みに開設したことがあり、その時の経験から避けたものである。かつて、教員側は、全学部の学生がほぼ確実に大学内におり、また、自由に使える時間として昼休みは利用価値があると考えていた。ただ、実際にこの時間に上記講座を開いてみると参加者は少なく、その時の不参加の理由としては、昼休みにはきちんと昼食を摂りたい、というのが非常に多かったのである。上記講座は昼休みに開催されることもあり、昼食持参（食べながらでも可）という設定にしたが、朝食を食べずに登校した学生にとっては、昼食は「ながら」ではなく「専念」したいもののようである。教員側としては、講座のために昼休みを勉強に費やすのは毎日のことではないし、またある限定された期間だけなので、昼食を食べながらでも良いだろうと考えたのであるが、これは失敗だったので、そこで今回も昼休みの時間を外した、という経緯がある。可能であれば、午後のお茶・おやつの時間、のような時に実施することも考えられるが、午後は授業があって難しい。

15名が回答した「場所を変える」については、教室ではない場所で行うことができれば、雰囲気も少し和らいで、参加しやすかったかも知れない。開催場所については今後に向けた検討

事項としたいと考えている。開催場所とともに検討課題になりうるのは、学生の意見の中にあった「共同作業を行う」というものである。ロールプレイング型の会話練習もあってもよかっただろうし、一緒に何かの作業を行いながら交流を深めるというようなことも考えられる。協同して中国式おやつを作ったり新聞を発行したりする可能性も視野に入れたい。

「先生役を留学生ではなくて教員がする」は５名いたが、教員はそもそも授業の前後やオフィスアワーなどで学生の対応をしているので、学生間交流促進の場である語学コーナーにまで立ち入るのは本意ではないし、そうした必要も感じない。「その他（自由記述）」の中に、授業時に一度体験してみるという意見があったが、これは通常の授業時間帯には留学生自身が自分の授業に出席していることもあり、実現は難しい。この２つの意見からは依存心の強さがうかがえる。

２．２　総括

以下ではこれまでの分析を総括しておきたい。

今回の取り組みにおいて参加者が伸びなかった最大の要因は、学生達の消極性にあると考える。行かなかった理由として自由回答に挙げられた「勇気がなかった」や「一人では行きづらかった」、さらには「友人が行かなかったので」がそれらを象徴している。中国語に限らず語学学習には、間違っても気にせずに話す、というような積極性とある種の厚かましさのようなものが不可欠なことは常に言われてきた。それがないというのでは語学を習得するのは難しい。これを乗り越えるにはどのような方法が考えられるかだが、日本では最初の外国語である英語の学習が始まった段階で規範性を強く求められる語学学習を強いられており、こうした姿勢は容易には変えられないであろう。受験のために英語を学習するということの弊害が他の外国語を学ぶ際にも表れているように思われる。リスニング・スピーキング（会話）を重視した英語学習へ、という流れもあるが、その一方でその学習成果を問うようなセンター試験でのリスニング試験導入などもあって、現時点では日本における高校生までの段階の語学学習は多くは受験のためのもの、と言わざるを得ない。実際に社会そのものが多言語化している諸外国とは異なり、日本では（特に地方都市の場合には）日常的に外国語を用いる場面は存在せず、そうなると、語学学習は学習者の努力の度合いと能力を測るものとして機能してしまう。宮崎大学の学生には大学入学の際の二次試験で英語が課せられない工学部を筆頭に英語を苦手とする者が多く、語学嫌いとその背景にある規範性への信仰からくるコンプレックスのようなものが、語学コーナーへの参加を躊躇させる原因ともなっていると思われるのである。

とはいえ、今回の語学コーナーには関心を持って参加した学生も少数ではあるが確実におり、また、参加していない学生の中にも効果があると考え、関心・興味を持つ者も多くいることから、取り組み自体は継続させてよいものだと考える。実施にあたっては、対費用効果をどのレベルをもってよしとするかであるが、これは評価も分かれるところであろう。無限にコストをかけられるのであればよいが、実際には留学生や日本人学生の利用可能な時間にはばらつきがあり、さまざまな時間帯で会話練習の場を提供するのは難しい。今後は出来る限り効果を上げることで成果を示したいと考える。

３．韓国語のアンケート結果の分析とその考察

この章では韓国語のアンケートの結果を分析し考察を行いたいと思う。平成21年度から初修外国語として加わった韓国語は年々受講者数が増加し、当該アンケートを実施した平成22年度は１年生向けの初級レベルのクラスは教育学部１クラスで42名、工学部１クラスで52名、農学部（看護・獣医・医学部からの受講生を含む、以下農学部と表記）１クラス54名体制で韓国語教育が実施された。当該アンケートに回答した学生の数はそれぞれ教育学部１クラスで41名、工学部１クラスで50名、農学部１クラスで54名であった。

本アンケートは全問11問中7問に記述式の回答欄があったが、語学コーナーへの参加の有無にかかわらず記述式への参加の比率は高く、教育学部は63回、農学部は61回、工学部は30回の自由回答があった。語学コーナーに参加した学生からは初めて異文化交流ができたことを素直に喜ぶ回答が多く、参加できなかった学生からは残念さとともにこれからの改善策が提示されていた。以下、語学コーナーに参加した学生と参加できなかった学生とに分けて各設問ごとに分析を行ってみる。

今回の語学コーナーに参加した学生は３学部からの13名と選択韓国語受講者（今回のアンケートの実施対象外）の２名を合わせて計15名であった。３学部合わせて148名の受講者の内13名のみが語学コーナーに参加している点からは参加の度合いが低かったと言わざるを得ないが、参加者別の参加頻度の内訳をみると１回が３名、２回が２名、３回が４名、５回が１名、10回が１名、無回答が２名と、初めて実施したプログラムにしては一過性で終わったのではなく、定期的に通った学生がいたことがうかがえる。

以下からは参加学生からの反応と参加できなかった学生の反応に分けて紹介する。

３．１　参加学生の反応

３．１．１　参加動機

まず参加した学生の参加動機であるが、複数回答可で次のような回答があった。①留学生と知り合いになりたかったから（６名）、②留学生と韓国語を使って話してみたかったから（９名）、③留学生と話すことで自分の語学力を向上させたかったから（３名）、④ポイント制度を利用して成績に加算したかったから（３名）、⑤その他：韓国の文化についていろいろ質問してみたかったから（１名）、留学生とのコミュニケーションをとり考えなどを知りたかったから（１名）、知り合いがいたから（１名）などの答えが返ってきた。これらの回答から、母語話者と実際コミュニケーションをとり知り合いになるチャンスとして語学コーナーを考えていることがうかがえる。これがまさに語学コーナーの主な設置目的であったことを考えると、学生達に正しくその設置意図が伝わっていたことがうかがえる。

３．１．２　参加した感想

語学コーナーに参加した感想は自由記述式で書いてもらったが、以下のような様々な回答が返ってきた。「①留学生の方と直接会話をして、韓国語の発音を耳で聞くことができたし、文化の話などを通して交流できて楽しかった。②毎回、留学生の方が優しくて、しっかり勉強も教えてくれながら、韓国に対する質問に答えてくださったり、いろいろ聞けたりしたので、韓国への興味がもっとわきました。③留学生と交流を深めることができて楽しかったです。④留

学生が親切、丁寧に教えてくれ、楽しかった。⑤楽しかったです。留学生の人の考え方などを直接知ることができた、ためになりました。⑥話す機会は滅多になかったので、とにかくネイティブの人と話せて楽しかったです。⑦教科書を勉強したい人にはいいのかなと思った。⑧とてもおもしろく異文化を知ることができた。⑨参加したが、なかなか知り合いが来なかったので、すぐに帰った。⑩テレビ番組の話ができて楽しかった。教室が寒かった。」

以上の感想からは、ネイティブの人と実際話してみるチャンスが得られたことへの肯定的な評価とともに、いくつかの問題点もうかがえる。７名の留学生それぞれの個性が表れたとは思うが、事前に提供された教科書を中心にコーナーを進めた学生と、芸能関係の話題も取り入れた学生によって日本人学生の反応が異なってくる、ということである。今回の語学コーナーにおいてはコーナーを始める前に教員によるオリエンテーションを行い、授業で使う教科書とともにその教科書内容の関連語彙の載った語彙集も渡していた。また韓国の最新映画やファッションを始めとする文化を紹介する雑誌も定期的に提供することによって、韓国国内の最新話題も学生に紹介できるように配慮していた。それらの資料をいかにコーナーに取り入れるかは留学生達に工夫してもらっていた。そのような経緯もあって、コーナーの性格自体はその日の担当留学生の個性に左右される面もあったと思われる。また、留学生の感想ともつながる部分として、語学コーナー専用の部屋がほしいという意見もあった。そのような部屋があった方が、設備の面で視聴覚教材も使えるなど、学生達により快適な環境が提供できるだろうと思われる。

３．１．３　語学コーナーの長所と短所、改善点

前述の３．１．２の感想ともつながるが、参加した学生達からは語学コーナーの長所とともに短所と改善点についての指摘もあった。改善点の指摘は今後コーナーの運営において大いに参考になる部分である。

「①留学生の方が優しく丁寧に対応してくださったので、気軽に行きやすかったです。②良かったところは、留学生が積極的に話しかけてくれるので、最初は語学コーナーに行くのをためらっていたけど、楽しく行けました。また、中国の留学生とも話すことができて良かったです。悪かった所は受けに来る人がなかなかいなかった所です。 ③留学生が優しくて良かったし、楽しかった。 とても親切だった。 悪かった所はどうしても日本語で話しがちになってしまった。④一対一でとても良かったと思う。⑤担当の留学生の方が決まってなかったので、教えるところにばらつきや重複があった。⑥授業とは違って、より身近に使うような言葉を教えてもらうことができた。⑦留学生が身近に感じられて良かった。」

以上の回答からわかるように、積極的な留学生の態度に学習意欲が掻き立てられた部分が多かったという肯定的な面がある一方、７名の留学生が順番制で交代しながら担当していたことから、定期的に通った日本人学生に対して留学生の学習内容が重複してしまったという問題点があった。次回からは定期的に通う学生達のために重複しない学習内容を提供するための留学生担当制の導入など、改善策を考慮する必要があると思われる。

３．２　参加できなかった学生の反応

３．２．１　不参加の理由、改善点

今回参加できなかった学生の多くの理由は次のようなものであった。「①どちらの曜日もバイトと部活が入っていて時間的に不可能だったから。②とても興味があり、参加したかったの

ですが、時間が合わず、行けませんでした。もっと機会を増やしてほしいです。③学園祭の実行委員で、準備があって、学園祭後、車の免許を取りにいったため。④とても行きたかったが、ほかの勉強が忙しくて行けなかった。⑤語学コーナーの方に行くと、帰りのバスがなくなるため。⑥興味はあったが、勇気がなかった。⑦会った事がない人ばかり、ちょっと怖がります。⑧敷居が高い感じがした。楽しそうな名前に変えるとかしゃべるだけじゃなくて何かを考えるとか、すればいいと思う。」

以上の回答からわかるように語学コーナーに行けなかった学生は、主に他の授業やサークル活動、アルバイトなどと時間帯が重なってしまったことを理由としてあげている。また面識のない留学生と初めて外国語で話すことの心理的な負担も理由として挙げている。これらの回答から、語学コーナーの実施時間帯をより学生が利用しやすい少し早目の時間帯に移すことや、初めてコーナーに参加する学生にとっても気軽に試せるようなコーナー作りのための工夫が必要であることが分かった。

３．３　総括

ここまでの考察からわかるのは、語学コーナーに参加した学生達からも、参加できなかった学生達からも、コーナーへの高い関心が伝わってきたということである。韓国語の語学コーナーを実施した初年度としては意義あるスタートを切ったと言える。

今後の課題としては、参加と不参加両方の学生達からの声を十分に反映し、よりレベルアップされた語学教育の場を学生に提供するためのさらなる工夫が必要であるということである。

４．講師役・管理役学生へのアンケートついて

以上、中国語・韓国語履修者のそれぞれの傾向とアンケート結果の分析を行ってきた。我々は、さらに講師役を務めた留学生と管理役をした日本人学生に対するアンケートを行った。その結果その全員から回答を得ることができた。以下、前の分析と重複する部分もあるが、その回答の結果を述べたい。

４．１　講師役留学生の回答

まず、講師役の留学生（全11名）の回答をみていきたい。初めに語学コーナーの目的を十分理解していたかどうかを尋ねたところ、４人が「十分理解していた」、７人が「理解していた」と答えた。教員からの教材活用についての説明も２名が「十分理解した」８名が「理解した」と答えている（未記入１名）。また、教員があらかじめ用意した教材を利用したかどうかきいたところ、11名中10名が「利用した」と答えた。教材に関しての意見としては、中国人学生１名から「検定用教材を使って欲しかった」というものがあった。これは日本人学生からの要求によるのかもしれないが、詳細は不明である。韓国人学生からは話すテーマについて、「教えてもらう側なので、どうでもいい」と言う日本人学生がいたことへの失望が述べられていた。教材については、おおむね、用意されたものを利用していたことがわかる。

講師役の留学生に「語学コーナー」に参加した中国語・韓国語を履修中の日本人学生について尋ねたところ、ほとんどの留学生が、日本人学生のまじめさと参加する度に上達をしていく様子、さらに会話練習を楽しんでいた様子を感じていた。先生役をした自分自身については、

全員「収穫があった」と答えている。さらに、今後同じ活動があれば参加したいかとたずねたところ全員が「参加したい」と答えた。

自由記述欄には、自身の国の文化も含めて相手に伝えられた事への喜び、さらに日本語で説明しなくてはならない場面が多かったため、日本語力の向上を感じたと書いた者が多かった。また、日本人学生と親しくなる機会になったこともうかがえた。さらに教師と生徒ではなくもっと友人同士のように話し合いたかったという者、参加者を増やすためにポイント数を増やすことを提案する留学生もいた。

２・３章の分析にもあったように、日本人学生にとって「語学コーナー」とはある程度外国語を話せる人が、外国語で話す、いわゆる「敷居が高い」ところであったようである。教員としてはまず参加する第一歩を後押しするために、ポイントを、さらに教材を用意し会話内容を限定して学習効果の強調をしたが、それは留学生と日本人学生の距離を広げてしまうことになったかもしれない。とはいえ、完全に自主的な参加の場を作ったとしても（成績に関連づけてもこの状態であるわけであるので）、現状では多くの参加者は望めない。参加者がなければ、この試みをする意味がなくなるわけで非常に頭の痛い問題である。

４．２　管理役学生の回答

次に、いわば客観的な視点で講師役の留学生と日本人学生を見ていた管理役の学生の意見をみていきたい。学生達には、監督をして、気づいたこと・留学生と参加している学生の様子を見て気づいたこと・ポイントカードを含めて、システムとして改善した方がいいと思ったことを自由に記述してもらった。

留学生と日本人学生の様子については、日本人学生が受け身の態度であったこと、参加者がいなかった日の留学生の残念そうな様子について書いた者があったが、参加者が（固定はしているものの）積極的にいろいろな質問をして、お互いの文化について語り合うなどよい交流の場であったと感じていた者がほとんどであった。興味深かったのは、学生どうしが初めは中国語や韓国語で会話しようと努力しているが次第に日本語で会話するようになり、結局は日本語で交流していたという記述である。語学力の向上という意味では効果が薄れるだろうが、まず文化理解をするという意味で授業ではなかなか触れられない部分が深められたといえるだろう。

また、語学コーナーの仕組みについては、スムーズだったと感じている学生がほとんどであるが、参加者の顔ぶれがいつも同じで少数である状況を変えた方がよいと考えている者が数人いた。参加者が少なかった原因については、場所と時間帯を挙げた学生が多く、さらに、友人を連れてきたらポイントをプラスするなどポイントをもっと活用する提案もあった。

講師役・管理役学生共に好意的な意見を持っていることがわかったが、日本人学生のアンケート結果とは差を感じずにはいられない。

おわりに

本稿では、平成22年度後期に行った中国語・韓国語の「語学コーナー」について、主にアンケートの結果に基づき、検証・考察を行った。

「語学コーナー」のシステムと教材については、おおむね評価できる結果であったといえる。しかし、教員側が示した成績への加点という条件があったにもかかわらず、参加者数は伸びな

かった。調査結果によると大部分の学生は参加した、しなかったに関わらずこの試み自体に否定的な感情を抱いているわけではない。さらに、実際に参加した学生と講師役を務めた留学生の反応からは、肯定的な意見が多く聞かれる。この取り組み自体は、継続する価値があると判断してよいだろう。ただし、本取り組みは、従来意図した語学力向上や学習意欲向上についての効果を上げるというよりは、交流を発端とした相互理解の場として機能していたと考えられる。

ただ、今後もこの取り組みを続けるには困難が伴う。参加者を増やすためには、時間や場所の設定に工夫が必要であるが、全ての学生が参加しやすい時間を選択することは不可能である。また、最初の一歩を踏み出す勇気、きっかけが必要な学生も多数見られたことから、ポイントカードだけでなく何かしらの仕掛けが必要であるが、教員がこれ以上この取り組みに時間と労力をつぎ込むことは現状として非常に難しい。そもそも異文化との接触や語学学習そのものに消極的な姿勢の学生を授業以外の場に無理矢理引っ張り出すこと自体、初修外国語の担当範囲を超えているともいえ、全体としての意欲向上を目指すだけであれば、別の方法も考える必要があるだろう。

また、教員の意図が学生に正確に伝わらなかった側面もあった。語学コーナーでは日本語を交えての練習も可能であること、90分間教室にいる必要はないことは、理解していない学生があったようである。これは、アンケートの「参加できなかった理由」から判明した。

そもそも、命名の由来となった中国の「語学コーナー」のあり方からいえば、学内に留学生と日本人学生の自由な交流の場が教員が関わらない自主的自発的な形で存在することが理想だろう。一部積極的な学生がいる一方、大多数の学生は受け身であり、自主的な「語学コーナー」も今すぐの実現の可能性については未知数である。しかし、学生自らが場所や時間、形式を考える事で、より多くの学生が参加できるようになることは大いに考えられる。今回教員が主導し、授業の延長の形で行ったこの試みが今後の自主的な取り組みのきっかけになることを願う。

ただし、今回この取り組みがあくまでも初修外国語の授業の一環として行われたことは忘れてはならない。この試みが語学力向上を伴わない単なる相互理解の場だけで終わってしまうのでは、学生達が留学生と接触する場を設ける意義がない。今後、語学教育の一環としてこのような会話練習の場を設ける際は、よりその教育的効果と意味を考慮したものにするべきだと考える。

その一方、学生に語学学習を通じて異文化理解をしてもらうことも語学教育には必要であり、「交流・相互理解」と「会話力向上」が矛盾しない形で場を提供できるような取り組みが求められているといえないだろうか。

今後も、以上の分析、考察をいかし、さらに今回の取り組みに修正を加えて、学生への働きかけを継続していく予定である。異文化理解もより質の高い語学教育を提供するという意味で、我々が使命感を持って取り組む問題であろうと考えている。

付記

なお、本試みにおける様々な作業やアンケート集計に関して、上原徳子が宮崎大学女性研究者支援モデル（平成22年度科学技術振興調整費［女性研究者支援モデル育成事業］）による研究補助者雇用の助成を受けた。宮崎大学と研究補助者鄒雲氏にここに記して感謝したい。

（平成23年５月６日受理）

注

ⅰ　教育文化学部准教授
ⅱ　教育文化学部准教授
ⅲ　前宮崎大学准教授、現天理大学国際学部准教授
ⅳ　ただし選択韓国語を除く。これは、アンケート用紙を準備した上原の単純な誤りである。
ⅴ　上原徳子、王廣慧「宮崎大学における初級中国語授業の学習意欲向上の試み」『宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学』第22号（2010年３月）
ⅵ　以下、パーセンテージは小数点以下を四捨五入して求めることとする。２つ以上のパーセンテージを加えた割合を必要とする場合には、元の数字を合計して母数で割り、改めて数値を出すこととしたので、元になる２つ以上のパーセンテージの合計とは若干異なる場合もありうる。
ⅶ　ここは設問としては「複数回答可」とはしなかったが、12名が複数回答を行い、16名が回答を記入していなかった。そこで、この設問を分析した以下のパーセンテージには「約」を付けておく。
ⅷ　回収できたアンケートは280名分なのだが、語学コーナーに関する設問に対しては「全員回答」としたものの、４名は回答を記入していなかった。
ⅸ　アンケートは授業時間中に実施し、また、短時間で記入できるシンプルなものだったにも関わらず、１枚目の後半から２枚目にかけての記入率は下がった。ここの総回答数は254名である。

＊参考資料　実施アンケート

注：なお、以下のアンケート原稿は実際に配布したものに、アンケート集計時使用した番号を加えるなど、よりわかりやすい形へ修正したものである。

平成22年度後期開設　語学コーナーに関するアンケート（受講生配布用）

このアンケートは、研究のために使用します。それ以外の目的には使いません。
また、出席番号はデータの整理のために書いてもらいます。成績とは全く関係ありません。

→中国語クラスのみ

クラス　中国語：上原／藤井　　韓国語：		
出席番号（中国語クラスのみ）		
1	1. あなたは語学コーナーに行きましたか？	①はい・②いいえ
	1-1　１で「いいえ」を選んだ人だけ答えてください。 あなたが行かなかった理由を教えてください。 ① 語学コーナーの時間には他の授業があったから ② 参加する必要が感じられなかったから ③ 興味がなかったから ④ その他（具体的に書いてください）	
	1-2　１で「はい」を選んだ人だけ答えてください。 あなたは何回行きましたか（わからなければだいたいの回数で）。（　　回）	
	1-3　あなたが語学コーナーに行った理由を教えてください。（複数回答可） ① 留学生と知り合いになりたかったから ② 留学生と中国語や韓国語を使って話してみたかったから ③ 留学生と話すことで自分の語学力を向上させたかったから ④ ポイント制度を利用して成績に加点したかったから ⑤ その他（具体的に書いてください）	
	1-4　語学コーナーに参加した感想を教えてください。	
	1-5　語学コーナーの良かったところ、悪かったところを教えてください。	

2	2. 語学コーナーについて聞きます。(全員) 語学コーナーは中国語・韓国語の習得に役に立つと思いますか？ ①思う　②思わない　③わからない
	2-1　「思わない」「わからない」と答えた人に質問です。なぜそう思いましたか？具体的に教えてください。
	2-2　全員に質問です。語学コーナーのような活動にもっと宮大生が参加するためにはどうしたらいいと思いますか？（複数回答可） ① 平常点にもっと反映する ② 時間帯を変える ③ 場所を変える ④ もっと宣伝をする ⑤ 先生役を留学生ではなくて教員がする ⑥ その他　（具体的に書いてください）
3	3.　語学コーナーを新学期入学してくる１年生に勧めたいと思いますか？ ①思う　②思わない　③わからない
4	4.　その他、語学コーナーについて思うことを自由に書いてください。今後の参考にします。

平成22年度後期開設　語学コーナーに関するアンケート（担当留学生用）

（このデータは研究のために使用します。日本語でうまく表現できなければ自分の母語で答えてもらって結構です。）

あなたの名前を教えてください。
出身を教えてください。

１．語学コーナーは何回担当しましたか？（わからなければだいたいで）　（　　回）
２．自分は語学コーナーの目的を十分理解していたと思いますか？
　①十分理解した　②理解した　③あまり理解しなかった　④理解しなかった
３．実際に学生と接した時の事を聞きます。
　3-1　用意されていた教材を十分活用しましたか。
　　①した　②しなかった
　　しなかったと答えた人に聞きます。それはどうしてですか？
　　①教材が使いにくかったから
　　②学生が自分で教材を用意してきていたから
　　③自由に会話をしたから
　　④その他教材への意見（活用した人も意見があれば具体的に書いてください）

　3-2　語学コーナーに来た学生はどうでしたか？
　　①まじめに取り組んでいた
　　②何度も参加するうちに上手に話せるようになった
　　③楽しんでいた
　　④内向的であまり話そうとしなかった
　　⑤その他（具体的に学生の様子を書いてください）

４．あなたが実際先生の役目をしたことについて質問します。
　4-1　学生への教え方など事前の説明を受けましたが、内容を十分理解しましたか？
　　①十分理解した　②理解した　③あまり理解しなかった　④理解しなかった
　4-2　先生役をして自分の収穫はありましたか？
　　①あった　②なかった　③わからない
　4-2-1　あったと答えた人に聞きます。どのような収穫があったと思いましたか。
　　具体的に書いてください。

５．このような活動は続けた方が良いと思いましたか？
　　①思う　②思わない　③わからない
６．語学コーナーにもっと多くの宮大生に参加してもらうためにはどうしたらいいと思いますか。あなたの意見を教えてください。

平成22年度後期開設　語学コーナーに関するアンケート　（監督学生用）

（このデータは来年度の紀要に発表する予定の論文に使用します。）

1	語学コーナーの監督を何回やりましたか？　　（　　回）
2	監督をして、気づいたことを教えてください。（自由に記述してください。）
	a　留学生と参加している学生の様子を見て気づいたことを教えてください。
	b　ポイントカードを含めて、あなたがシステムとして改善した方がいいと思ったことを教えてください。